平安・室町時代貴族住宅の「二階」について

THE BUILDING "NI-KAI" IN THE ARISTOCRATIC RESIDENCE

FROM HEIAN TO MUROMACHI PERIOD

溝口正人*
Masato MIZOGUCHI

From Heian to Muromachi period the building called "ni-kai" was built in the aristocratic residences. The architectural style and the spatial characteristics of "ni-kai" are analyzed in this paper.

From the instances described in the ancient dairies and the archives in Heian, Kamakura and Muromachi period, it is concluded that "ni-kai" in the aristocratic residence was the facility for enjoying fine view and the events of amusement in the garden. Its architectural style was not of ordinary twostoried, but of elevated main floor.

keywords: ni-kai, twostoried building, aristocratic residence, Heian period, Muromachi period
二階、二階建築、貴族住宅、平安時代、室町時代

1. はじめに

鎌倉時代までの日本建築には、金閣や銀閣をイメージの基本とするような楼閣建築の明確な類例がみられない点、そしてその積極的な導入の契機として、鎌倉時代以降の禅宗寺院建築の影響が多であった点についてが、太田博太郎氏により考察されている¹⁾。

太田氏も指摘するように、古代の寺院建築の塔や金堂においてみられる重層構成は、外観の意匠的なものに留まり、人が利用可能な空間（室空間）としての二階は存在しない。少なくとも現存遺構で判断する限り、金閣や銀閣のような上下階ともに利用可能な室空間を伴う二階建築あるいは楼閣建築の住宅への導入の契機を、禅宗寺院建築における二階建築の導入に求めることについては、広く認められている²⁾。また画像史料としては、古くは楼閣建築の実在性の有無に関する話題を提供した唐戸・鍵遺跡出土土器片に描かれた建築画や、長屋王邸宅跡出土の「楼閣山水之図板絵習書」にも二階建てに類する建築が描かれている。しかしそれらが太田氏が述べる

ような室空間としての二階を伴った楼閣建築の存在を示すものかについては明確ではない。

一方太田氏も言及されるように、鎌倉時代以前の文献史料には「二階」あるいは「二階屋」と記された住宅建築の事例が存在する。太田氏はこれらを金閣や銀閣のような楼閣建築に類するものとしたうえで³⁾、それらを特殊なものとして⁴⁾、広くは流布しなかったとした。しかしながら特殊であろうとも、史料上に「二階」と記された事例が存在するとすれば、それは二階建築あるいは楼閣建築の流布を禅宗寺院建築の影響に帰結させる上で、看過できない問題といえよう。また従来の研究では、文献史料にみられる「二階」あるいは「二階屋」という語句の意味する建築形態に対しての十分な検討は行われてこなかった。同様に「楼閣」建築と「二階」建築が同一視できるものかについても検討の余地を残している。

そこで本研究では、平安時代から室町時代初期における文献史料にみられる住宅建築の「二階」「二階屋」の事例を取り上げて、そこにみられる建築形態や用途につ

* 修士(工学)

M. Eng.

いて検討し、二階建築の形態的イメージについて再整理を試みたい。本稿ではまず住宅における「二階」の事例について検討する。

「二階」あるいは「二階屋」と記述される建築には、様々な態様があり得る。一般的に、「二階」という語から想定される建築形態には、一・二階共に室空間を伴ない、空間的な二層構成が考えられるが、この他にも外観のみの二階・二重構成であり、室空間としての二階が存在しないもの、あるいは室空間としての一階を伴わず、望楼建築（物見台）のように、床が通常の二階レベルと認識されるような高床建築が考えられよう。以下本文では、これらの建築の総称として二階建築という語を用いることとした。

2. 平安時代末期の住宅における二階

以下、文献史料に記録された住宅における「二階」の建築形態についての考察を中心に進めていくが、まず最初に、禅宗寺院建築における二階建築の導入以前となる平安時代末期の諸例を取り上げる。

a) 法住寺南殿の二階釣殿

太田静六氏が言及されたように⁵⁾、『兵範記』仁安3年(1168)8月4日条(高倉天皇朝親行幸時)により、法住寺殿における「二階釣殿」の存在が知られる。それは同記に「二階釣殿上東西二面格子、西〔南か〕北二面下之、其内東西二行敷紫端帖、爲院殿上侍臣座、儲饗廿前(院庁令弁備之)」(下線筆者、以下同じ)と記されるものである。紫端畳を東西行に敷き、饗座の膳が20膳設けられたところからみて、東西に長い建物であったことになる。

当日条の記事によれば、東中門廊南端にあったとみられる東釣殿とは別の殿舎であり、四面に格子をたてていたとみられるから、独立した殿舎であったと考えられる。また太田静六氏の考察にあるように、中島南に存在した「中釣殿」と同一視すれば⁶⁾、付属屋として船寄が設けられるような規模が想定される。『兵範記』記事には、殿上侍臣座となった階以外についてなんら言及しない。釣殿という名称からみて、その建築形態は室空間としての一階を伴わない高床型であった可能性が高い。

この二階釣殿の記事は仁安2年(1167)の移徙以降である。仁安2年の改造は、寝殿の変更にまで及ぶ大規模なものであったことが明らかにされており、この二階釣殿の存在が応保元年(1161)の新造移徙時点にまで遡るのか、あるいは仁安2年に新造されたものであるのかは明らかではない。応保元年度の殿舎構成を示すとされる『年中行事絵巻』には描かれていない⁷⁾。

b) 源定房三条亭の二階御所

中山忠親の撰作とされる『貴嶺問答』⁸⁾には以下のよ

うに記される「二重舎屋」あるいは「二階御所」の存在が知られる⁹⁾。

「先年源大納言三条亭被構立二重舎屋、眺望四隣爲歛樂所、回祿之後雖有造作之事、今度無其屋、件様者、暑月納涼尤有便宜、欲構立此蓬屋如何、可被計示之状如件、二階御所事、京中猶屬目歟、宮繕令曰、私第宅皆不得起樓閣臨觀人家者、此事非穩便歟、仍言上如件」

源定房(1130~1188)¹⁰⁾の三条亭には「二重舎屋」と記される建築が存在したという。そして後述する安元3年(1177)4月28日の太郎焼亡で、定房の三条亭も被害に遭い、「二重舎屋」も焼失したのである。その後、邸宅の再建に当って、「二階御所」建造の可否を問われた忠親は、次稿でも述べる『宮繕令』の私第宅樓閣禁止条を根拠にその穩便ならざるところを述べ、結果としてそれは再建されなかった。

文中では「二重舎屋」と「楼」とを同義、また「二階御所」もほぼ同義としており、『宮繕令』の「樓閣」に相当するとしている。「二重」と記するから、あるいは空間的な二層構成であった可能性もあるが、『令義解』に説く「楼者、重屋、閣亦楼也」との記述を受けての表現であり、単に外観上の二重を示しているとも考えられる。「二階」の「御所」との記述からは、眺望や納涼を目的とする二階を主体とした物見棧敷的な建築とみられ、この点で形態的には高床型と考えるのが妥当であろう。また庭園に関係した建築であり、「歛樂所」とされるような会所的遊藝施設と考えられる。また「蓬屋」と記されるから、草葺・黒木造といったような、通常の住宅建築と異なった意匠が想定される。

この三条亭の位置については明確ではないが、『玉葉』太郎焼亡当日条には「焼亡所々…源大納言(在西京云々、当時不居住彼之家也)」と記するから、西京の三条近辺となる。あるいは『源平盛衰記』¹¹⁾に記される「良相公ノ西三条」か「高明御子ノ西宮」に比定されるものと考えられよう¹²⁾。焼失当時は定房常住の邸宅ではなかったのであるが、その位置や、遊藝施設としての二階御所の存在から考えると、庭園を主体とした遊藝目的の別荘的性格を持つ邸宅であったともみられる。

c) 源通光久我亭の二階之台閣

『明月記』建永元年(1206)8月19日条には「両少将清範季能等招引、乗月向左衛門督久我亭、…亭主出逢、昇二階之台閣、望田野月非無興、亭主琵琶、雅少将吹簫、具少将笛、出題詠三首歌、鶏鳴帰」と記され、源通光の久我亭での「二階之台閣」の存在が知られる。

久我亭は鴨川と桂川の合流点の久我に位置し、村上源氏の祖、源師房が別邸を営んだことに始まる。その後に源顕房の所領として「久我水閣」とも記され¹³⁾、以後、雅実を経て村上源氏の洛外御所として用いられている。師房以後の造営については明らかではないが、通光の父

通親の時代の久我亭の様子が、通親作の『擬香山模草堂記』（以後『草堂記』と記する）により知られる¹⁴⁾。文治2年（1186）頃の制作と比定される『草堂記』には¹⁵⁾、通親が久我亭を伝領して後、寿永3年（1184）頃の久我亭の様子について以下のように記する。

「長元六年夏、曩相右丞相、…作為蝸舍、雖非燕寢、高閣低廊、率称心力、…僕伝八九年、往来幾千廻、…試披草堂記、忽模竹塙様、広袤不過三間、豊殺又以方丈、柱柱非斷、石階以礎、湛藍溪水、開白蓮池、々中立竹台、々南渡松橋、環崖多青田、…夾谷有翠松…遂明年林鐘之末、草堂新成、…於新堂招河南元集、四月九日也」

この記述によれば、通親の造作により文治2年頃に新堂が建立された。また新堂完成以前、通親伝領時の久我亭には、黒木造ともいべき意匠の住居、庭園の池、その中島と思われる位置に「竹台」、その南に架けられた「松橋」が存在していたという¹⁶⁾。またこれら草庵的な意匠の建築と、溪谷には田が開かれ松が生えるといった田園風景と合わせて、久我亭は洛外御所としての鄙びた景観を形成していたという。通光の久我亭伝領は建仁2年（1202）の通親死去によるものと考えられるが、通光伝領以後の久我亭の造作については確認されない。

『草堂記』の記述は、「二階之台閣」が存在した時点での久我亭の殿舎構成に比定できるであろう。

『明月記』によれば、久我亭における「二階之台閣」は、奏楽や和歌会が行われる会所的な性格を持つ遊宴施設であり、眺望や観月を目的とした高い床レベルを持つ建築であったといえる。具体的な形態について明らかではないが、これら記述内容における「二階」の「台閣」という語からは、二階の室空間を主体とした高床型の建築が想定されるであろう。少なくとも主たる室空間としての下階は存在していなかった可能性が高い。

またその機能は観月・眺望の場であるとするから、庭園に関係した建築である。『草堂記』に記する施設では「竹台」がそれに比定できよう。そうであれば竹を用いた数寄建築ともいべき意匠であったことになる。建築そのものが遡るのかは不明であるが、『草堂記』に師房造営時の建築構成として記された「高閣低廊」の「高閣」に相当するものとも考えられる。

久我亭は、『草堂記』の「雖非燕寢」という記述が示すように、師房造営時から居住というよりは洛外における遊宴を目的とした別荘として造営されたものであり、通親や通光の時代でも、その性格が踏襲されていた。黒木造、竹台、松橋といったような、通常の住宅建築と異なった意匠の建築の存在は、まさに遊宴・数寄空間としての久我亭の性格によるものといえよう。そして「二階之台閣」は、そのような空間的性格を有する久我亭における遊宴施設のひとつだったといえる。

d) 福原の平清盛邸の二階棧敷殿

『平家物語』巻七には、以下のような福原の平清盛邸の記述に「二階の棧敷殿」の存在が記される¹⁷⁾。

「故入道相国の造りおき給ひし、春は花見の岡の御所、秋は月見の浜の御所、雪の御所、萱の御所とてみられけり、馬場殿、二階の棧敷殿、…いつしか三年に荒れはてて、…台かたぶいて苔むせり」

福原の平清盛邸は、仁安4年（1169）3月20日には後白河上皇の御幸を受けるような施設として、その存在が知られる¹⁸⁾。承安元年（1171）の上皇御幸時には船遊びを行なうような庭園が存在していた¹⁹⁾。『平家物語』は寿永2年（1183）7月25日時点での清盛邸を描写したものと看做すが、二階の棧敷殿は、岡の御所²⁰⁾、浜の御所、雪の御所といった四季をつかさどる御所、萱御所、馬場殿とともに、清盛邸の構成要素とされている。

『平家物語』は同時代の一次史料ではなく、成立時期が下るとされ、諸本間に記事の異同も多い。しかし上皇の御幸を受けるような庭園が存在した清盛邸の施設として、萱御所、馬場殿と並んで、その多くに共通して記されている「二階の棧敷殿」の存在の可能性はある。少なくとも鎌倉時代における二階建築のひとつのイメージを表したものとみることができよう。

この記述からは「二階の棧敷殿」の具体的な建築形態については明らかではない。しかし「二階」の「棧敷殿」という名称からは、物見棧敷的な「二階」を主体とする高床型の建築が想定される。あるいは傾いて苔むしていたという「台（うてな）」がそれに相当するものとも考えらる。馬場殿や萱御所の、遊宴・数寄建築としての存在については既に指摘されている²¹⁾。それら殿舎と共に記述される「二階の棧敷殿」は、庭園における眺望を目的とした遊宴施設として位置付けられているといえる。またここに描かれた福原宮の清盛邸は、同時代の院御所や洛外御所と同様に、遊宴施設を伴う構成として記述される。それは当時の社会の頂点に位置する貴族邸宅の普遍的なイメージを示したものと考えられる。

3. 鎌倉末から室町時代の住宅における二階

禅宗寺院における上下階に空間を伴う空間的な二層構成の二階建築の存在は、既に鎌倉時代よりみられる。元弘元年（1331）の裏書を持つ建長寺指図によれば、方丈には得月楼と命名された二階が存在し²²⁾、その他にも山門などにも同様な構成と考えられる殿舎がみられる。また室町時代には足利義満の北山第における舍利殿（金閣）のように、住宅にも多層構成の事例がみられる。しかしながら二階の事例がすべて二層構成の形態であるか否かについては検討が必要であろう。以下、住宅における二階建築の事例を取り上げる。

a) 北山殿(西園寺)の二階

北山殿は、西園寺家の菩提所として公経の手により元仁元年(1224)12月に完成となった、洛外の別荘的性格とを合せ持った邸宅である。本堂西園寺を始め、多くの仏堂が庭園を中心に建てられた。また池や滝の配される庭園が優美であるのみならず、都を遠く望むその眺望が特徴的であったという²³⁾。また西園寺の北方には寝殿があり、公経の居所とされた²⁴⁾。

鎌倉末期には、実兼が持明院統の後伏見院の外戚となったため、後伏見院以下の北山殿への度々の御幸、行幸が行われた。そのため『花園天皇宸記』(以下『宸記』と記する)には北山殿に関する記述は多い²⁵⁾。そして太田氏や川上氏が言及されたように²⁶⁾、北山殿における「二階」の存在が記される。『宸記』に記された北山殿の「二階」は以下の3例である。

・元応元年(1319)10月18日条

「直至西園寺、南庭方歴覧、…於北面方実衡卿等参、…数献之後供御膳、更至西園寺方、池辺遊行歴覧、又至二階方、及深更歴覧、雪月興計会」

・元応2年4月17日条

「今日御幸北山第、朕同参、先於女院御方御対面、其後南庭方并二階方御歴覧、於北第、入道相国参、御対面良久、其後於南有孟酌事、及日没乗船」

・元亨3年(1323)11月26日条

「急幸北山第、於惣門内、令宣衡告右大将可馳馬之由、…即大将騎馬候御共、…所々歴覧、…堂方御歴覧、降地之處、深雪行歩尤難、自成願心院至二階、暫眺望、於寝殿南面供酒膳」

当時の北山殿は、実兼やその娘永福門院の御所として用いられている²⁷⁾。邸内は大きく北第と南第に分れ、それぞれが居住施設や仏堂を伴ない構成されていたようである²⁸⁾。そして元応元年条の記事にみられるように、西園寺は、主として南方の池を中心とする庭園の中に営まれていた²⁹⁾。池では度々船遊びが行われており³⁰⁾、そのほとりには釣殿があったという³¹⁾。「二階」は、この庭園の一郭に位置していたとみられ、「池辺遊行歴覧、又至二階方」あるいは「南庭方并二階方御歴覧」と記されるから、南庭からはやや離れた位置であったと考えられる。元亨3年条によれば、積雪時に、地面へ降りずに成願心院から二階へ行くことができたというから、この二つの殿舎は廊等で繋がっていた可能性が高い。

この「二階」は元亨3年条に記されるように、そこからの眺望を目的とする殿舎であり、元応元年条によれば、そこでのなんらかの会が行われたようでもある。この点で既述の二階の系譜に則るものともいえるが、その具体的な建築形態は明確ではない³²⁾。

b) 二条家押小路殿の二かい

二条良基の作とされる『おもひのまの日記』の以下

の記事によれば³³⁾、摂関家である二条家の押小路殿に「二かい」が存在したとされる。

「六月廿日ごろ、いとあつき比なれば、いずみもてあそび給うとて、二条の家に行幸有³⁴⁾。御かたがひのよしなり。…東にたかき松山あり。山のふもとよりわきいづる水のながれ、松のひびきをそえていとすずし、水のうへに、二かいをつくりかけたれば、やがて座の中をながれ行石間の水、さながらそでうつばかりなり。ながれの末のすがた、入江々々にしまじまのたたずまる、いとおもしろく、西のながれのすゑに、山を隔て五尺ばかりの滝落たり。滝のうへにつくりかけたる二かいのさまなど、山里めきていとおかしう見ゆ」

この記事によれば、押小路殿の庭園建築として、東の松山より湧き出た流れの上に「つくりかけた」「二かい」と、その流れの末の滝に「つくりかけたる二かい」が存在したという。内容からみてこの2例は別建物とみられるが、遣水の上、あるいは滝の上に作り掛けたものであり、流水を楽しむための栈敷的な性格の建築と位置付けられるであろう。前者は『春日権現絵巻』に描かれた藤原俊盛邸の泉殿とされる殿舎のように³⁵⁾、床の一部が空き、建物の下を通り抜ける流水がみられるような構成であったとみられる。また「山里めきていとおかしう見ゆ」とされた後者の場合、いわゆる数寄屋的な意匠であったとも考えられよう。いずれにしろ、その設置形態からみてこれらの「二かい」は、室空間としての下階は存在していなかったと考えられる。二階建築としては、高床建築に属するものといえよう。

押小路殿は、二条家祖の良実以来、二条家の本亭とされた邸宅で、押小路南・室町東に位置する³⁶⁾。後鳥羽院政下、泉が湧出したことに伴ない院御所として整備され、以来その庭園により知られた存在であった。室町時代に入っても文和2年(1353)6月6日に後光厳天皇の行幸を受けるなど³⁷⁾、その位置付けについては変わっていない。『空華日用工夫略集』(以下『日工集』と記す)によれば良基の代に整備が行われたようであり、庭園を中心とした良基時代の施設構成については以下に挙げる『日工集』の記述に詳しい。

・康暦2年(1380)8月8日条³⁸⁾

「八日赴二条殿倭漢連句会、入西門延視泉園池亭水石、其美不可勝言、名其池曰龍躍、記実也、此者当昼有龍躍雨下之变、曰御榻閣、天子所生榻在焉、曰洗暑亭、曰聴松亭、曰蔵春閣、曰緑楊橋、曰政乎水、曰観魚台、曰古霊泉、曰水明楼、曰梅香軒、既而准后出、接余於水亭、互叙久渴之懷、引入御榻閣、倭漢連句百韻」

・康暦3年9月25日条

「廿五日過二条准后、謝昨日不赴会之意、准后引入御榻閣対談、及古今倭漢詩文曰、…准后又求余名新楼、且曰旧名十境、其政乎水、則月中岩所名也、水明楼則先皇賜

名、親御宸翰云」

これらの記事によれば、押小路殿には当時の禅宗寺院や足利將軍邸同様、趣向を凝らした庭園空間に十境が命名されていた。建築的には同一殿舎のものがあるとも考えられるが、康暦2年条によれば施設として御榻閣、洗暑亭、聴松亭、蔵春閣、観魚台、水明楼、梅香軒、水亭の名が挙げられている。3年条によれば、水明楼は後光厳天皇の命名になるものであり³⁹⁾、またこの前後に「新楼」が建造されたという⁴⁰⁾。後円融天皇所生にちなむ榻が置かれていた御榻閣は、両例とも倭漢連句会の会場として用いられており、会所的施設といえる。

ところで『宸記』元応元年(1319)7月29日条の以下の記事により、押小路殿には既に鎌倉時代末から、これら二階に相当する泉屋の存在が知られる。

「院御幸二条前関白押小路亭、爲泉辺納涼也、如法密々、非御幸儀、…到押小路亭、前関白寄御車、即歩泉亭、下車後頃之雑談、…有暫退出、有小弓弓場、仍被召御弓、但即供肴物之間不及射之、一献後召禅閣、即参、数献及乱会、諸人銘酊、…禅閣銘酊之余落縁、公秀卿取揚之、…泉屋上所懸唐絵兩三対、院御方被召之、花瓶香爐等同被召之」

泉辺での納涼を目的として押小路殿へ御幸した後伏見上皇と花園上皇は、まず泉亭で歓談、その後弓場で小弓を行ない、その後また場を移して酒宴となった。禅閣兼基が縁から落ちたという酒宴の場は明確ではないが、泉亭とは別な場のようなのである。そして前関白道平から上皇へ、「泉屋上所」の舗設装束が贈呈された。「泉屋上所」とは、文字通り泉屋の上った所とされよう。下階の存在は明らかではないが、泉亭という目的から考えると、この殿舎の形態は高床状のものであった可能性が高い。そして御幸に当って、後述する喫茶之亭と同様な唐絵三対や花瓶香爐等で舗設されたという。数寄座敷ともいべき性格の殿舎であったといえ、それが既に鎌倉時代末に存在していたことになる。

『おもひのまの日記』に記された「二かい」がこれらのいずれに該当するのかは明確ではない。東の松山の流れに設けられた「二かい」が聴松亭、滝の上の「二かい」が洗暑亭か水明楼に比定されるともいえ、あるいは水亭や新楼がそれらに該当するとも考えられる。いずれにしても、これら庭園建築のうちのいずれかが、高床型の形態を示しており、それが「二かい」として認識されていたといえよう。そして押小路殿でのこのような二階建築の存在は、鎌倉時代末にまで遡るのである。

c) 『喫茶往来』の喫茶之亭

室町時代初期の作とされる『喫茶往来』には⁴¹⁾、当時の茶会の様子と共に二階の棧敷を持つ「奇殿」の存在が記される。

「抑彼会所爲体、内容殿懸珠簾、前大庭鋪玉沙…[会所

で三献・食事の後]、其後起座退席、或対北窓之築山、避暑於松柏之陰、或臨南軒之飛泉、披襟於風水之涼、爰有奇殿、峙棧敷於二階、排眺望於四方、是則喫茶之亭、対月之砌也、…客位之胡床敷豹皮、主位之竹倚臨金沙、加之處々障子、飾種々唐絵、…西廂前置式対之飾棚、而積種々珍菓、北壁下建一雙之屏風、而構色々懸物…会衆列座之後、亭主之息男献茶菓、…[闘茶が終り]調美肴、勸酒飛盃、…式歌式舞、増一座之興、又絃又管、驚四方之聴」

これによれば、会所で三献・食事の後、休憩を経て、庭園内の喫茶之亭での闘茶、酒宴、歌舞管弦となった。座の舗設は中国趣味に彩られたもので、室周囲の障子には唐絵が懸けられ、西庇前には飾り棚、北壁の前に立てられた屏風の下には懸物が積まれている。そこでは狂喜乱舞の酒宴が繰り広げられており、パサパサともいべき遊覧性の強い闘茶の一場面が示されている。

「爰有奇殿」以下の部分の記述によれば、喫茶之亭は庭園内の独立した殿舎である。闘茶の会場となった棧敷は、文中の表現を借りれば、そびえたつ二階で四方に眺望が開け、観月の場でもあったという。この二階の棧敷は北壁や庇が存在し、周囲には障子がたてられてた。また周囲を眺望できたというから、あるいは四周に縁がまわる望楼の構成であったとも考えられる。棧敷についての詳細な記述の一方で、下階の存在についてなんら言及されない点からみれば、少なくとも主たる室空間として下階が存在しなかった可能性が高い⁴²⁾。二階の棧敷を主空間とした高床型の建築形態が想定されよう。

また一方でそれは奇殿と記されるから、このような形態は新奇性に富むものとみられていたともいえる。意匠的にも他の建築とは異なった、数寄屋建築ともいべきものであったとも考えられよう。

d) 九条殿の二階

『後愚昧記』応安3年(1370)8月15日条には「今日未終刻雷雨、消肝、後聞、雷落九条前関白亭二階、件日爲賞良辰、於二階有連歌会之最中霹靂云々、青侍二人爲雷公披露死了…雷公落人家事、希有事也、可恐々々」と記し、九条前関白經教亭に二階が存在したとする。

九条前関白亭とは、鎌倉中期以降の九条家本邸となった九条小路殿を示すものと考えられるが⁴³⁾、この九条殿の「二階」において、連歌会が開かれていた最中に落雷があり、死者も出たという。

ここでの「二階」の意味するところは明確ではない。「九条前関白亭二階」と記されるから、この「二階」とは建築の室空間としての二階というよりは、二階の建築そのものを示しているものとも考えられる。また連歌会が開かれていたとされるから、その他の例と共通する、会所的な性格の施設であったといえよう。

4. 住宅建築における二階

以上、平安時代末期および鎌倉時代末期から室町時代の住宅における二階建築の諸例について検討してきた。これら二階建築は、いずれも庭園の眺望を目的とした物見棧敷的な用途に供される庭園建築であり、そこでは詩歌・管弦会といった遊藝が行われる会所的性格をもった殿舎であった。そのうち少なくとも二条家の押小路殿の例は、明らかに高床型の形態となる。その他の例は、史料の制約から下階の存在を完全に否定はできない。しかし詳細が不明である北山殿や九条殿を除くと、源定房三条亭が「二重舎屋」と記された点で、空間的な二層構成である可能性を残しているものの、二階の棧敷を主体とした構成が想定される点で諸例は共通している。

これら「二階」とされた二階建築は、眺望を目的として床が高く立ち上がった室空間としての二階が主体なのであり、その場合、必ずしも下層での室空間は必要とはならない。そこに想定される建築形態は、いずれも高床型に類するものであったと考えられよう。そしてその様な形態や性格の二階建築が、平安時代末期から室町時代に至るまで存在し続けていたと考えられるのである。

しかしながら、「二階」と表現される建築すべてに、このような建築形態を想定することの可否は、広く「二階」の事例を検討する必要がある。またこれら二階建築が、どのような系譜により造営されてきたのかも問題となろう。次稿ではそれらの点について検討したい。

註 記

引用史料文中の（ ）括弧内は割註を、[ ]括弧内カタカナは史料校訂、ひらがなは筆者註を示す。

- 1) 太田博太郎「楼閣建築に関する一考察」『中世の建築』彰国社1957 pp138～145.
- 2) 川上貢『日本建築史資料集成』十六 書院Ⅰ、中央公論美術出版1971, 解説 pp3～4. 中村利則『町屋の茶室』淡交社1981 pp191～199.
- 3) 太田氏は「目を一度住宅建築に移して見ると、そこには平安時代からこの種の建築の先駆と考えられるものが存在している。」とする。
- 4) 太田氏はこれらの事例を「しかしながらこれらの二階屋は比較的簡単なものであり、かつまた特殊なものとして広く用いられてはいなかったようである。」とした上で、「二階」が禅宗寺院建築に多く見られる点に注目し、いわゆる二階建築が禅宗建築の影響により起ったとする。桜井秀氏は『総合日本史大系』第四巻、内外書籍1925, p517. において、後述する『貴嶺問答』を引き、同様に二階を特殊な例とする。
- 5) 太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館1987. 第五章第四節。なお太田博太郎氏前掲書においても、記事の存在について言及されている。
- 6) 太田静六氏は『玉葉』安元2年(1176)3月5日条(後白河上皇五十奉算賀)に「…於中釣殿乗船(其釣殿東面有船寄、然而依無便宜、於南面汀乘之)」と記される中

釣殿を、その位置関係から二階釣殿に比定する。

- 7) 法住寺殿の沿革と『年中行事絵巻』との関係については、川本重雄「法住寺殿の研究」『建築史論叢』中央公論美術出版1988. による。
- 8) 『群書類従』巻139 所収。『群書解題』では撰作年代を寿永2年(1183)以降、鎌倉時代初期とする。
- 9) 記事の前半部分は『古事類苑』居處部に収録されている。
- 10) 村上源氏。雅兼の子で中院右大臣雅定の猶子となる。『山槐記』や『玉葉』に源大納言と記される。永万2年(1166)7月15日に権大納言、後に大納言となり以後20余年その位にあった。
- 11) 『源平盛衰記』巻四による。ただし、後述する語り物系『平家物語』の該当部分には記されない。
- 12) 『拾芥抄』にはそれらの位置について、「西三条(三条北朱雀西、良相大臣家、俗云百夜公事[百花亭か])」「西宮(四条北朱雀西、高明御子家)」と記する。いずれも西京、朱雀院近辺である。
- 13) 『中右記』寛治元年(1087)2月10日条「上皇遊覧鳥羽辺宅、并右大臣古河水閣、上達部、殿上人直衣騎馬」、なお同月5日に完成、移徙となった鳥羽南殿について、同記5日条に「入夜上皇初有御幸鳥羽水閣」と記する。『中右記』における「水閣」とは、水辺に臨む建築を示し、必ずしも二階建築を意味しないと考えられる。
- 14) 『擬香山模草堂記』および白氏文集の草堂記など先行諸作品との比較については、品川和子『擬香山模草堂記について』『学苑』第369号、1970.9による。
- 15) 『草堂記』の制作年代を、橋本義彦『源通親』吉川弘文館1992. では文中「僅伝之八九年」との記述により寿永3年(1184)頃とする。しかし文中の後半の記述からは、その明年に「草堂」を建立した時点での述懐となる。品川氏の指摘にある文治2年(1186)頃の制作とするのが妥当である。
- 16) 「開白蓮池、々中立竹台、々南渡松橋…」の部分は『草堂記』独自の記述であり、久我亭の実態を示すものと考えられる。
- 17) 『平家物語』巻七「平家一門都落ち」条。源義仲入京直前寿永2年(1183)7月25日の記事である。本文は新潮日本古典集成本(語り物系の国会図書館蔵本が底本)による。読み物系に属する『源平盛衰記』では、同一内容は巻三十二「福原管絃講」条に入る。なお本文検討にはこの他に富倉徳次郎『平家物語全注釈』角川書店1967、杉本圭三郎『平家物語』講談社学術文庫、『参考源平盛衰記』改定史籍集覧1901、『源平盛衰記』国文叢書1914を用いた。
- 18) 『兵範記』同日条。高野山御幸帰途時の御幸である。
- 19) 『百鍊抄』同年10月23日条「太上法皇建春門院御幸太政大臣福原別墅、有船遊事、遊女賜禄」
- 20) 『平家物語』巻五、物怪条によれば「岡の御所」は遷都時の新造とされる。
- 21) 藤田勝也「萱御所について」日本建築学会計画系論文報告集、第382号、1987.12。拙稿「平安宮・後院と摂関家住宅の馬場殿 馬場殿の研究 その1」日本建築学会計画系論文報告集、第446号、1993.3
- 22) ただし、方丈の再建は貞治年間(1362～1367)まで下る(横山秀哉『禅の建築』彰国社1967, pp78～79)。
- 23) 『増鏡』第五、内野の雪。仏堂としては善積院、功德蔵

- 院、池のほとりの妙音堂、石橋の上の五大堂、成就心院、法水院、化水院、無量光院が記される。
- 24) 註23)「北の寝殿にぞ大臣は住み給ふ」
  - 25) 文保3年(1319)正月14日の御幸を始めとする。
  - 26) 太田氏前掲書、及び川上氏前掲書pp10～11。
  - 27) 『宸記』元応3年2月19日条によれば、北山殿は永福門院の本所御所であったという。本文元応2年条に記された女院御方とは、永福門院御所を示す。
  - 28) 『宸記』文保3年5月15日条、元亨2年6月11日条。
  - 29) 西園寺の位置関係について『とはずがたり』巻三には、弘安8年(1285)の北山准后九十賀宴に際して「北殿より西園寺へ庭道を敷く。両院、…堂々御巡礼ありて、妙音堂に御参りあり。」と記する。御所北殿が賀宴会場となり、その南方の池のほとりに西園寺他の諸堂が位置した。この北殿と、『宸記』に記される北第・南第、あるいは『増鏡』に記する「北の寝殿」との関係は明らかではない。
  - 30) 本文引用『花園天皇宸記』元応2年条、元亨3年9月12日条及び註29)など。
  - 31) 註29)に同じ。
  - 32) 『宸記』では元亨3年11月8日条に「二階堂」と記した椎野の伏見院納骨堂を、元亨2年10月10日条では単に「二階」と記するから、「二階」という語からは形態は確定できない。なお川上氏は註26)において、「金閣の構想の一半に二階殿が大きく参考になったと思われる。」とする。
  - 33) 『群書類従』巻第489 所収。底本は一条兼実自筆本である。『群書解題』によれば、康暦～永徳年間(1379～1383)の成立かとされる。記述事柄からみて成立時期はやや下ると考えられるが、内容の矛盾は見られず、成立は同時代として妥当である。なお『おもひのままでの日記』の制作年代と制作者については別稿としたい。
  - 34) 管見の限りでは、貞治元年(1362)から正長元年(1428)までで該当する行幸は確認されない。註37)に述べるように、定式化していた行幸であったとも考えられる。
  - 35) 太田静六氏前掲書p882
  - 36) 押小路殿の伝領については高群逸枝『平安鎌倉室町家族の研究』国書刊行会1985による。
  - 37) 『園太暦』同日条「今晚寅刻許行幸執柄押小路亭、当代初度行幸也」。後光厳天皇は前年8月17日に踐祚した。「当代初度行幸也」との記述から、押小路殿への行幸が定式化していたものとも受けとれる。
  - 38) 延文4年(1359)に足利基氏の招きにより鎌倉に下っていた義堂周信は、この年に足利義満の招きに応じてほぼ20年ぶりに上洛した。文中に記述によれば、この記事は、以前から親交を結んでいた良基の招待で押小路殿を訪れた時のものである。
  - 39) 前出文和2年行幸時の命名の可能性が高い。
  - 40) 康暦2年条に記する「水亭」がそれに該当するものとも考えられる。
  - 41) 『群書類従』所収。『庭訓往来』の作者として知られる玄恵法印(～1350)の作とされるが明確ではない(『群書解題』による)。茶会の記述内容から室町時代初期とするのが通説である。
  - 42) 中村氏は註2)において、北壁の存在や唐絵を障子に懸ける舗設から闘茶の場の開放性に疑義を持たれ、「その二階というのは単なる望楼であり、規模もさほど大きくなかったのではないだろうか。そしてその一階に茶湯の場が設けられていたと考えたほうがよさそうである。」とする。しかし文意からみて、闘茶の場は二階とみるのが自然である。単に北壁の存在などから二階の「喫茶之亭」を二層型建築と想定した上で、一階の存在を比定することには問題を残す。
  - 43) 高群氏前掲書による。位置は九条北富小路西あたりと考えられるが明確ではない。

(1993年6月10日原稿受理、1993年12月27日採用決定)